The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	看護師への調査から見た日本の医療現場における業界用語の使用状況ー外国人看護師向けの学習支援を目指してー
Author(s)	Popova, Ekaterina
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/96019
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（ポポヴァ　エカテリーナ）	
論文題名	看護師への調査から見た日本の医療現場における業界用語の使用状況 ―外国人看護師向けの学習支援を目指して―

論文内容の要旨

本研究では、日本で働く外国人看護師および外国人看護師候補者（以下、候補者）への日本語学習支援に資することを目指し、医療施設に勤務した経験がある日本人看護師による業界用語の使用意識をもとに、医療現場における業界用語の使用状況を明らかにすることを目的としている。この目的を達成するために、以下の4つの研究課題を設定した。

① 医療現場における様々な診療科では、どのような業界用語が使用され、それらにはどのような特性が見られるか。
② 業界用語は、どのような場面でどのような相手に対して使用されているか。
③ 業界用語はどのような機能を持ち、看護師の業務遂行上どのような使用意義が認められるか。
④ 看護師は、業界用語の使用上どのような困難・問題を抱え、また、それらの背景には何があるか。

本研究は、全部で9つの章から構成される。

第1章では、本研究の背景として、医療グローバル化が進んでいる状況下で、医療外国人人材の需要が高まっており、それに伴って外国人看護師および候補者の受け入れが進められていることを示した。しかし、外国人看護師は試験のために習得した専門用語と現場で実際に使用される略語や言い回しなどの業界用語の差異に困難を感じており、医療機関で業務を行う際にコミュニケーションの問題が大きな障害となっていることを確認した。

第2章では、まず専門日本語と専門日本語教育の概念についてまとめ、専門日本語教育の枠組みにおいて行われてきた看護の日本語教育と医療現場の業界用語に関する先行研究を概観した。外国人看護師および候補者向けの日本語教育においては、看護師国家試験の合格を目指した教育が中心となっており、国家試験の合格後、現場での業務に必要な日本語の教育は施されていない状況にあることを確認した。また、業務の日本語の一部である業界用語は、学習項目として扱われていないだけではなく、それを対象とした研究自体も非常に少ない。存在する研究の中には、業界用語の使用がもたらす問題に着目したものが認められるが、業界用語が使用され続けている状況や背景を明らかにする必要もあるということについて述べた。

第3章では、本研究で実施したアンケート調査とインタビュー調査の方法および協力者の詳細などの調査概要を示した。アンケートは、医療現場において使用される業界用語の具体例を収集し、またその使用率・状況を包括的に明らかにするためのもので、関西地区の医療施設に勤務経験がある看護師74名を対象に行った。また、インタビュー調査は、アンケート調査で得られた回答に基づいて、アンケート調査の協力者74名のうち、20名を対象に半構造化形式で実施した。

本研究の研究課題①に対する答えとして、まず第4章では、医療現場における業界用語の使用率を明らかにした。その結果、使用率の高い業界用語は、看護業務上の一般業務となっている患者のケアや診療・治療の介助などを表す用語が多いことが明らかになった。また、使用率の低い業界用語の中には疾患や症状、また特定の疾患を持つ患者を指すもので、専門性が高い業界用語が含まれていた。それぞれの業界用語をリスト化した上で、外国人看護師や候補者が現場への着任後、直ちに必要になる使用率の高い業界用語を優先的に指導することが求められることを述べた。

次に、第5章でも研究課題①について、業界用語の特性に焦点を当て、業界用語の多様性および固有性について検討

した。その結果、業界用語には形式および意味が複数であり、すなわち業界用語におけるレジスターには高い多様性が存在していることが分かった。また、業界用語には診療科、施設、地域等といった空間、医療従事者の中での職種、世代別に異なって使用されるものが存在し、業界用語は現場や使用者に依存して固有性の高いものであることが示唆された。こうした業界用語の多様性や固有性は、現場独自の習慣、規則、勤務環境などに関わるいわゆるローカルな情報を有しているだけではなく、日本の医療現場の文化的・歴史的な要素を表象しており、医療従事者の現場への理解を深める過程においてきわめて重要であることを論じた。

また、第6章では、研究課題②の問いに対して、業界用語が使用される場面およびその使用相手といった業界用語の使用条件を明らかにした。まず、業界用語は「申し送り」や「処置中」などの「口頭」の場面において患者の疾患や症状、状態、治療方法、器材や物品、医薬品などに関連する情報を共有するために用いられることが分かった。それらに加え、患者情報の開示に伴い看護記録では医療従事者ではない者にも理解できるように業界用語は使われない傾向にあるが、業界用語は「自分用のメモ」「掲示板」「張り紙やラベルの表示」といった「書記」の場面においても多用されることが分かった。また、看護師は、薬剤師やリハビリテーション技師など、医師や看護師以外にも、多様な医療関係者や治療に直接関わっていない事務職員などのスタッフにも業界用語を使用しているが、コミュニケーションを図る際に「相手の職種」「相手の勤務経験」「相手との対人関係」を判断して意識しながら業界用語を使い分けていることが明らかになった。このように、業界用語の使用には「場面的要素」や「人的要素」など複合的な要素が関わっており、さらにそれらの要素が渾然一体となっているため、業界用語の使用状況は複雑で錯綜したものであると結論付けた。

さらに、研究課題③について、第7章では業界用語の機能として「情報伝達の効率化」「秘密保持・秘匿」「婉曲化」「ユーモア表出」の4点を取り上げて、それぞれの使用意義について考察を行った。「情報伝達の効率化」には会話時の時間短縮と記録時の負担軽減という使用意義、「秘密保持・秘匿」には患者などへの配慮とともに患者の個人情報保護の使用意義、「婉曲化」には患者の死がもたらす医療従事者の心理的負担の予防としての使用意義、「ユーモア表出」には明るい雰囲気作りやストレスの軽減などの使用意義があると考察した。しかし同時に、業界用語の「秘密保持・秘匿」および、「ユーモア」のための業界用語の使用に関しては、批判的で難色を示した看護師がいたため、個々の使用意識の差異が同僚同士の対立を引き起こす可能性があることにも触れた。業界用語は多機能を有し、医療従事者間のコミュニケーションを円滑化するとともに業務遂行上で利便性の高い言語的ツールであることが示唆されたが、これらの機能が効率的に活かされるためは、全ての医療従事者の間で業界用語の意味合いやその使用場面などに関する知識を共有している必要があることを指摘した。

最後に、研究課題④を解明するために、第8章では業界用語の使用上生じる困難・問題に加え、それらの原因や背景を明らかにした。まず、3年以上の勤務経験がある看護師でさえ理解できない業界用語を見たり聞いたりすることが多く、業界用語を理解できなかったことにより困難・問題を感じた看護師が70%を上回っていることが明らかになった。また、看護師は業界用語が理解できないことに問題を感じており、その原因は業界用語が持つ言語変種の多様性や、具体性の欠如にあることが示された。その場で用語の意味を確認できれば、重大な問題には至らないことが推測できるが、看護師は、理解できなかった用語の意味を現場で即座に確認し得ない場合もあり、その点にも問題を感じていた。その原因は、現場で同僚に対し用語の意味確認が行えない雰囲気や、一刻を争う緊急場面で確実な意味確認が不可能であることにあった。つまり、業界用語の使用上発生する問題は、業界用語自体の理解が困難である点に加え、医療現場におけるその用語の使用場面や相手との関係など、様々な要素が関わっている。そのため、個々の医療従事者は、業界用語がコミュニケーションを阻害し得ることを意識して相手に配慮するとともに、業界用語の学習を促進する環境を構築できるように貢献することが求められると述べた。

終章の第9章では、各章で明らかになった実態および課題をふまえ、業界用語を専門日本語教育に導入する必要性について考察を行った。まず、業界用語の知識は、外国人看護師や候補者に日本での専門家として働く力（ability）を与えられ、すなわち、エンパワーメントをもたらす存在であることを示した。その一方で、業界用語が理解できないことによる問題は業務への支障を来す場合もあるため、看護師が常に業界用語を学び合えるような環境を作ることが

重要で、すなわち、業界用語の教育の実現が必要であることを指摘した。さらに、業界用語の使用状況について得られた知見をもとに、業界用語の専門日本語教育への導入の方向性として、業界用語の指導を「着任前」と「着任後」という段階に分類し、前者は「候補者向けの研修」においての指導、また後者は「受け入れ施設での研修」および「OJT（職場内訓練）」での指導に分類することを提案した。まず、候補者向けの研修では、外国人看護師にとって着任後に直ちに必要となると推測される使用率の高い用語およびその基本的な使用場面を指導し、次に受け入れ施設での研修では受け入れ施設独自の用語およびその使用法に関するニュアンスなどを含めた指導の必要性を指摘した。さらに、OJTにおける業界用語の学習を促すためには、ディスカッションなど、他の同僚との対話を通して業界用語の学習を支える必要性について論じた。

本研究では、これまで光が当てられていなかった業界用語の新たな視点を見出せるとともに、日本で働く外国人看護師を育成する際に必須の専門日本語教育の内容改善につながり、ひいては外国人看護師らの現場への適応および医療現場でのコミュニケーションの円滑化を実現することが期待できると考える。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　ポポヴァ　エカテリーナ　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	村岡　貴子
	副 査　准教授	大谷　晋也
	副 査　教授	山下　仁

論文審査の結果の要旨

本博士論文の題目は「看護師への調査から見た日本の医療現場における業界用語の使用状況 －外国人看護師向けの学習支援を目指して－」である。本論文では、3年以上勤務経験を有する看護師74名を対象としたアンケート調査と、調査協力者となった看護師20名へのインタビュー調査から得た大量のデータに対し、業界用語に関する言語学的な分析に加え、日本語教育学、特に専門日本語教育研究の観点から考察を行っている。全9章から構成された本論文は、資料と参考文献を加えて291ページに上る。以下、各章の内容を要約して評価を加えつつ審査結果を示すこととする。

第1章では、本論文のテーマの背景を、多数の文献の知見をもとにまとめ、本研究の目的を示している。本論文が注目する業界用語は、外国語を起源とする略語も多く、それらを使用する医療従事者にも理解困難な場合が存在するため、医療現場で必須のコミュニケーションの障壁となる事態の可能性を指摘する。昨今、日本では経済連携協定（EPA）を通じて受け入れられた外国人看護師・看護師候補者が増加する状況から、こうした日本語を母語としない者には、職場でのコミュニケーションが困難を極める場合が想定される背景を説明する。命や健康に深く関わる医療現場における業界用語の使用実態や使用上の問題点を追究する研究の目的と重要性を丁寧に記述している。

第2章では、専門日本語および専門日本語教育の定義を踏まえ、かつ、看護日本語教育、医療現場における業界用語等について詳細に先行研究を概観し、本研究の位置付けを明確にしている。英語教育学と日本語教育学を中心とした各種先行研究により、Japanese for Specific Purposesの分類から看護の日本語教育の位置づけを示している。その上で、看護師国家試験の日本語、看護業務の日本語に関する先行研究の知見に言及し、さらに医療現場における業界用語の使用状況、場面、機能および業界用語による問題点についても丁寧に記述し、研究の位置付けの議論に繋げている。

第3章では、調査概要として、本研究でのアンケート調査とインタビュー調査の詳細を説明している。アンケート調査については、フェイスシートの他、業界用語の使用率に関する調査票と業界用語の使用状況に関する調査票が作成され調査に用いられた。調査は、先行研究や医療業界用語辞典等も活用して収集された210語の中から無作為抽出された65語の用語リストをもとに行われ、多数の診療科の74名から調査協力を得ている。半構造化インタビュー形式の調査では、業界用語の使用場面や使用相手、困難・問題に加え、業界用語の必要性についても尋ねている。

第4章では、医療現場における業界用語の実態と題し、使用率の高い業界用語と低い業界用語、また、使用頻度の高い業界用語と低い業界用語について各々データを一覧にし、「ナート（縫合）」「体交（体位交換）」等多数の見出し語の意味や由来を示している。使用率の低い業界用語の事例にも着目して議論を行い、特定の疾患症状や特定の疾患を持つ患者を指す用語や、専門性の高い用語の存在も明らかにした。「ステる（死亡する）」や「ワンショット（薬剤を静脈内に一回で注入すること）」のように、使用率が低いものの使用者数が多い業界用語にも言及されている。

第5章では、医療現場における業界用語の多様性・固有性という2つの特性を取り上げる。前者では、レジスターの多様な形式の存在を指摘し、外国語起源の用語を「プシコ（精神病患者）」と「プシる（精神疾患を持つ）」のように、先行研究も引きつつ、看護師によって異なる変異が用い

られる状況を示し、また、意味の変異として、同一表記の同音異義語の例も示した。さらに、業界用語の固有性では、診療科、施設、地域、職種、世代ごとに分けて事例を分析した。

第6章では、業界用語の使用条件について、口頭か書記かの使用場面と使用相手に分けて分析・考察を行っている。口頭による使用場面では、職場内での同僚同士の会話、申し送り、処置中、職場外での同僚同士の会話に、また、書記による使用場面では、記録、メモ取り、掲示板、張り紙やラベル表示に分け、多くの看護師から得た豊富な語りのデータから、具体的に業界用語の使用条件を示している。ここでは、論文著者がある病院を見学した際に見たエンゼルケアセット（死亡処置セット）等をイラスト化し、業界用語が示す対象をきめ細やかに読者に紹介する工夫も見られる。

第7章では、業界用語の機能と題し、情報伝達の効率化、秘密保持・秘匿、婉曲化、およびユーモアといった4つの機能に分けて業界用語を考察している。この中で、看護師同士ではなく、目前に患者やその家族がいる場合の、患者の容態を迅速に医師に伝える場面も取り上げられ、患者への羞恥心や不安への配慮がなされた業界用語について議論が展開されている。また、看護師が業務とは別に、自身の心身の状態を示す遊び言葉として用いる事例（例：タキる（頻脈になる））や、その使用を批判した看護師の語りも分析され、業界用語の機能に深く切り込んだ考察も見られる。

第8章では、業界用語の使用上生じる困難・問題と題し、勤務経験の豊かな看護師が6割以上含まれる協力者全体において、80％以上が今でも理解できない業界用語を見聞きしており、それらは外国語起源の用語に加え、病名、検査名、機材、手術の術式等、医師から言われるもの、他の病院から移動してきた場合に見られるという。こうした困難・問題の事例では、半数以上が困難な意思疎通を経験したという事態の深刻さを示す。本章では、インタビューで詳細にエピソードを聞き取り、問題・困難が、業界用語が持つ言語変種の多様性・固有性や、具体性の欠如に起因することを明らかにした。また、その場で業界用語の意味確認が行えない雰囲気や、確実な意味確認が不可能な緊急場面があることも明示した。日本語母語話者の看護師も困難を感じる用語は、外国人看護師には「二重の外国語」となると指摘した。

第9章では、本論文の4つの研究課題に対して考察をまとめた上で、結論として、業界用語を専門日本語教育に導入する必要性に関連して、「エンパワメントを導く言語資源としての業界用語」「業界用語を取り巻く課題」に分けて詳細な議論を展開し、今後の課題を提示した。結論部分では、専門日本語教育としての業界用語の導入に向け、看護師としての着任前の導入が必要な用語リストを示し、かつ、業界用語の学習・教育・支援の流れの明快な図式化を試みている。図は、着任前と着任後に分け、導入段階、学習形態、指導内容、指導者・支援者に分類し、いつ、誰が、どのような形態でどのような内容を扱えるかについてOJTの概念も導入してまとめている。ここには、現場の看護師や医療関係者、日本語の教師といった関係者の関与と連携が目指されている。

以上9章から成る本論文は、多くの評価できる点を有する。以下3点にまとめて提示する。

まず、2019年12月以降に開始されたデータ収集はいわゆるコロナ禍であり、通常でもアクセスしにくい、医療現場の経験ある多くの看護師に対して、長期にわたり根気強く調査を継続し、非常に得難い有用なデータを確保した点である。研究テーマへの着眼点の新規性・独創性とともに、論文著者の多大な労力と長期間費やされた研究への意欲と情熱を高く評価したい。

次に、本論文は、日本語学、日本語教育学、英語教育学、看護学、社会言語学等からの国内外の多数の文献を援用して業界用語の位置づけと使用実態を明確にし、用語に関する言語学的な知見を提示するとともに、業界用語への理解や運用、広くコミュニケーション上の困難・問題について、大量のインタビューデータへの丹念な分析から考察を深め、教育や学習支援への新たな提案を行っている。論文著者は、医療現場の業界用語の使用状況の分析・考察にあたって、言語、人間、それらと密接に関わる文化・社会を鋭く観察し、常に当該現場をメタ的に捉え、学際的にも有意義な発信を行った。このような研究者としての姿勢は、高く評価されるものである。

さらに、各章の考察は、議論を繋ぐ章立て等の論理構成も明確であり、同時に、最終章までの文章は一貫して、的確な表現選択のもと論文文体の格調を維持しつつ読みやすいものとなっている。

以上のように、論文の完成度は高く、専門日本語教育研究や他分野に与える示唆は大きい。テーマも、現在と将来の日本社会の重要な側面を取り扱った有意義なものであり、将来性と発展性が強く認められる。以上のことから、博士（言語文化学）の学位論文として価値あるものと認める。